

セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術

【第1回】結論は3行で

物質・材料研究機構 轟 眞市

簡単なことを複雑にするのはよくあること。複雑なことを簡単に、驚くほど簡単にすること—これが創造力だ

—チャールズ・ミンガス (米国のジャズ・ベース奏者、1922-79)[1]

連載開始にあたって

筆者は本誌 2007 年 3 月号において、セレンディピティ(偶然を契機にして道を切り開く能力)を磨く方法のひとつはプレゼンテーション技術にある、と主張した[2]。自分の仕事に触れた人が、何らかのアクションを起こしてくれる様なプレゼンを常に心掛けることで、偶然を拾う機会が増えていく。プレゼン技術の How-to を解く文書は巷に溢れしており、筆者もその幾つかから技術を吸収した。本連載では、筆者が特に重視しているノウハウを、5 回に渡って見開き 2 ページでまとめてみたい。口頭発表で使う上映資料*の構成法を中心に据えるが、ベースとなる考え方には文章執筆にも応用できる。構成例として示す上映資料は、筆者が本誌で紹介してきた光ヒューズとファイバフューズに関するプレゼンテーションで実際に使ったものである。読者の方々のセレンディピティが向上することに繋がれば幸いである。

プレゼンすることが決まつたら、、、

まずタイトルを考えるのは誰でもやっていること。筆者は同時に、上映資料の 1 枚目を作ってしまう。さらに続けて結論の 1 枚も書く。ただし、わずか 3 行に納まるように練り上げる。3 行に凝縮する理由は、重要なポイントを 3 つに絞り、それをひと目で把握してもらうためであ

とどろき しんいち: 光材料センター 主幹研究員

〒 305-0044 茨城県つくば市並木 1-1

URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/

* プrezenを行なう時に、スクリーンに投影する資料のこと。

る。その際気を付けるのは、想定される聴衆の興味に合わせて具体的に記述することである。Slide 1 をご覧頂きたい。光ヒューズ[3]を開発した後、初めて行なった学会発表のひとつで用いた上映資料である(2004 年春の応用物理学会、15 分)。短いながらも、具体的な数値を盛り込んである。

<div style="width: 40px; height: 15px; background-color

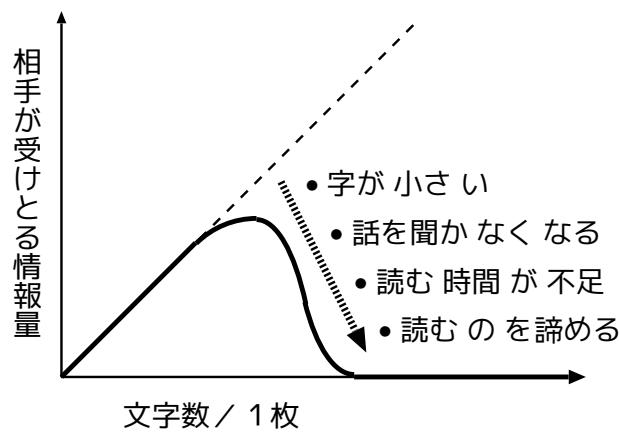


図1: 上映資料1枚あたりの文字数と聴衆が受けとる情報量の関係。

イントを3行にまとめられないのなら、もしくは、まとめてみた内容に魅力を感じないのなら、プレゼン本番で時間泥棒と囁かれるのは必至である。3行にまとめる作業は、プレゼンをするに値する材料を持っているかを測る試金石なのである。

鳥の目と蟻の目

もちろん準備を進めていくうちに、当初設定した3つのポイントを修正することはあって良い。最初に結論を3行にまとめておく意味は、全体の構成を決めることがある。全体が決まつていれば、安心して部分に集中することができる。集中の結果露見した綻びは、直ちに全体にフィードバックすれば良い。全体像を把握しないままの作業は迷走に過ぎない。

また、早くに準備に着手することの益は、野口悠紀雄氏も「『超』整理法」で述べている[4]。書けるところだけ書いておき、しばらく寝かせておけば良い。まとまった内容が書けるまで待っていると、いざ執筆を開始する時にまとまった時間とエネルギーが必要になる。そして着手が先伸ばしになる。少量でも寝かせておけば、次にファイルを開いた時に、過去の自分とは別の視点で推敲をることができる。

言われてみれば当たり前のことかもしれないが、それを常に徹底する意志こそが大事である。

参考文献

- [1] デビッド・アレン、田口元(監訳):“ストレスフリーの仕事術—仕事と人生をコントロールする52の法則”, 二見書房(2006).
- [2] 轟眞市:“セレンディピティの磨き方—ファイバヒューズ研究に至った縁と偶然(2)世界初の超高速撮影—人を動かすプレゼンテーション”, 工業材料, 55, 3, pp. 92-95 (2007).
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33120>
- [3] 轟眞市:“光ヒューズの開発—偶然は手を動かして掴むもの”, 工業材料, 55, 2, pp. 92-95 (2007).
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33118>
- [4] 野口悠紀雄:“「超」整理法”, 中央公論社(1993)中公新書1159.

セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術

【第2回】眠らせない布石

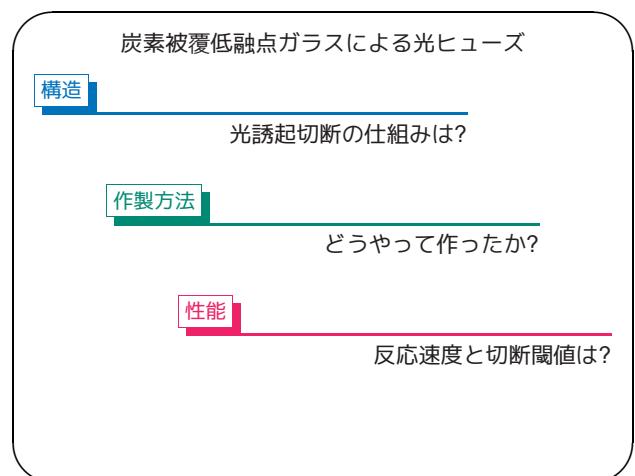
物質・材料研究機構 轟 眞市

愚か者がしゃべる時、賢者は眠っている(スウェーデンの諺)[1]

セレンディピティ(偶然を契機にして道を切り開く能力)を磨く方法のひとつはプレゼンテーション技術にある[2]。この連載では、自分の仕事に触れた人が何らかのアクションを起こしてくれる様なプレゼンテーションを行なうために、筆者が特に重視しているノウハウを紹介している。前回は、結論として提示する上映資料を3行に収めるルールを提示し、これを準備作業に着手する段階から作成して、全体の構成を把握すべきことを説いた。今回は、これと対をなす冒頭に示す上映資料に関するルールを解説する。

まとめの3行を書き終えたら、、、

その各行が回答文となる様な疑問文を考え、それらを並べた上映資料をつくる(Slide 2参照)。これをプレゼンテーションの本題に入る前に提示し、その後の話の流れを印象付けるのである。なぜ、疑問文なのか?それは、聴衆の意識が問い合わせる方向に向かうので、後に続く話に集中してもらえるからである。これを疑問文を使わずに、単に話の内容を表す語句を並べるだけに留めれば、その様な効果は強くは現われないだろう。



Slide 2

話の本題に入る前にそのアウトラインを示すのはプレゼンテーション技術の基本中の基本だが、その意味する所は聴衆がプレゼンに集中し続けてもらう点にある。一般に聴衆の集中力は、講演が進むにつれて低下してくる。よって、聴衆の気が散漫にならいうちに、話の流れを意識させることが肝要である。

話の流れが見えないプレゼンを聞く身になって考えてみて欲しい。流れの方向を見極めるために、ずっと話に集中していなければならない。その話が面白ければ、その集中は快感となるので問題は無い。しかし、集中が単なる作業となってしまうと、気を抜けない状態の継続は疲労を伴い、眠気を感じる様になる。

再びプレゼンする側から考えると、聴衆の全員が面白く感じてもらえる話題を話す機会はそう多くない。よって、話の流れを提示せずにプレゼンすることは、「理解できる人だけに分かってもらえば結構」、という突き離した態度を示すことに等しい。

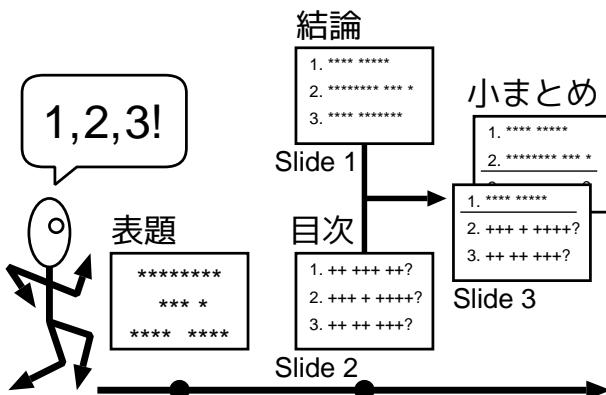
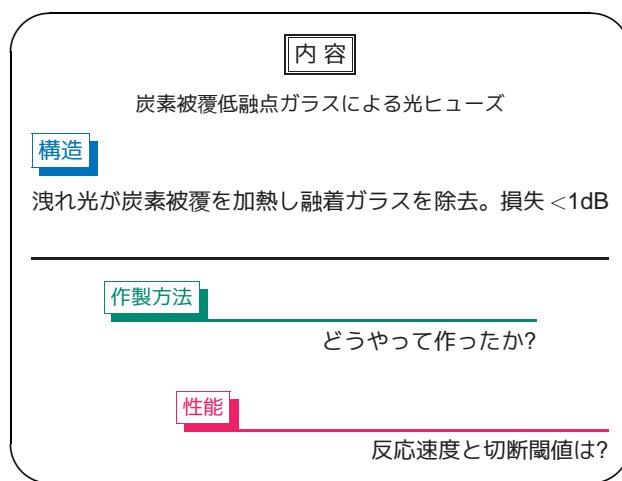


図2: 話の流れを示す上映資料(目次、結論、小まとめ)の関係。

論理構造の視覚化

話の流れを示す機会は冒頭だけではない。筆者は、3つあるポイントのうち一つを説明し終える毎に、Slide 3のような「小まとめ」を提示し、説明し終えたポイントの確認と、次に続く話の流れを再提示することにしている。これは、Slide 2と前回に示したSlide 1から合成したものであり、両者が完成していれば自動的にあと2枚の上映資料ができる訳である(図2参照)。



Slide 3

同じ語句を異なる2~3箇所に打ち込むのは面倒と思われるかも知れないが、それは発表者の都合であって、聴衆にとって分かり易い方や良いに決まっている。この手間を軽減するために、筆者はプログラミング機能が利用できるソフトウェア(pLATEX2e)を使って執筆している[3]。

この種の機能を使えば、すべての上映資料に個々のタイトルとは別に「見出し」を挿入することも簡単である。ここで言う「見出し」とは、

Slide 2 と 3 の中に四角で囲った 3 つの単語のこととを指している。聴衆はこの「見出し」を手がかりに、3 つあるポイントのうち、いまどのポイントが話されているのかを知ることができる。不幸にして寝入ってしまった聴衆も、目覚めた時に「見出し」を見ることで、話の流れに戻ることができる。この様な上映資料への作り込み作業を、筆者は「論理構造の視覚化」と名付けている[3]。

参考文献

- [1] 外山 滋比古：“現代ことわざ辞典”, ライオン社 (1995).
 - [2] 轟 眞市：“セレンディピティの磨き方 — ファイバヒューズ研究に至った縁と偶然 (2) 世界初の超高速撮影 — 人を動かすプレゼンテーション”, 工業材料, 55, 3, pp. 92–95 (2007).
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33120>
 - [3] 轟 真市：“プレゼンテーションと情報管理”,
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:28491>

セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術

【第3回】5行ルール・文章より絵を

物質・材料研究機構 轟 眞市

過ぎたるは猶及ばざるが如し —孔子 (551–479 B.C.)

セレンディピティ(偶然を契機にして道を切り開く能力)を磨く方法のひとつはプレゼンテーション技術にある[1]。この連載では、自分の仕事に触れた人が何らかのアクションを起こしてくれる様なプレゼンテーションを行なうために、筆者が特に重視しているノウハウを紹介している。前回は、話の流れを示す目印やまとめを上映資料内の要所に配置し、聴衆が視覚的に論理構造を把握できる様にすることの重要性を説いた。今回は、話の本題を示す上映資料を作る際のルールを解説する。なお、例示した上映資料の技術的内容に関しては、以前の記事[2]をご参照頂きたい。

話の流れを示す上映資料を作り終えたら、

残りは話の中身を示す上映資料である。先に3つのポイントを決めた時点で全体の構成は定まっているから(鳥の目)、今度は各ポイントが明確になるように練り上げていけば良い(蟻の目)。その際、筆者が自身に課しているルールは表題に示した2つ。(1)上映資料1枚に書く語句は5行を越えないこと、(2)文章による記述は極力排し、下手でも良いからイラストを書くこと、である。

上映資料一枚に書き込める文字の量は限られている。前々回の図1にも示したが、文字をたくさん書いても、相手が受けとる情報量は増えることはない。字を大きく表示でき、話を聞きながら読んでもらえる分量として5行を設定している。

とどろき しんいち: 光材料センター 主幹研究員
〒305-0044 茨城県つくば市並木1-1
URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/

Slide 4は、ファイバフューズ現象の説明に用いたものだが、文字にする内容は必要最小限に抑え、残りはイラストで表現している。上で「局所的加熱」と抽象的に書いておいて、下ではその具体的な手段を絵で表している。絵を描くことは文章を書くことより何倍も時間が掛かるが、聴衆に短時間のうちに理解させる効果を利用しない手はない。特に母国語以外でのプレゼンの時には、効果絶大である。

背景

- 1987年に発見
- 回路の局所的加熱で発生
- 停止デバイスの提案はあるが、現象の本質は未解明

ファイバフューズ

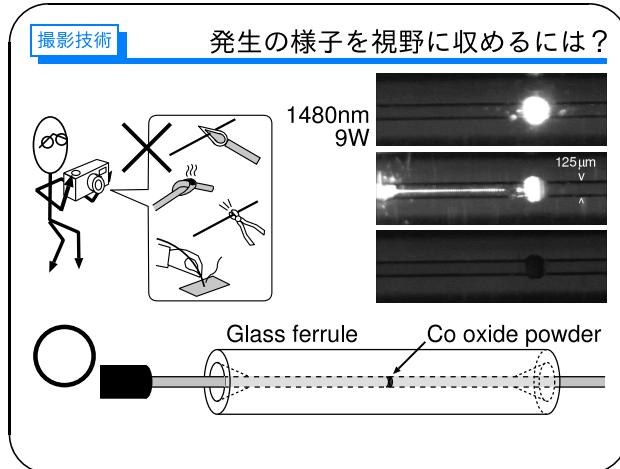
Slide 4

絵は自分で描くべし

絵は出来る限り自分の手で書くのが良い。インターネット検索を駆使してよそから拝借するのは簡単だが、自分の伝えたい意図を100%反映している絵に出会うことは希である。もし見つかったとすれば、その意図は既に誰かが発表していることを意味している。伝えたい意図と完全に合致していない絵を使うと、聴衆をミスリードすることに繋がる。

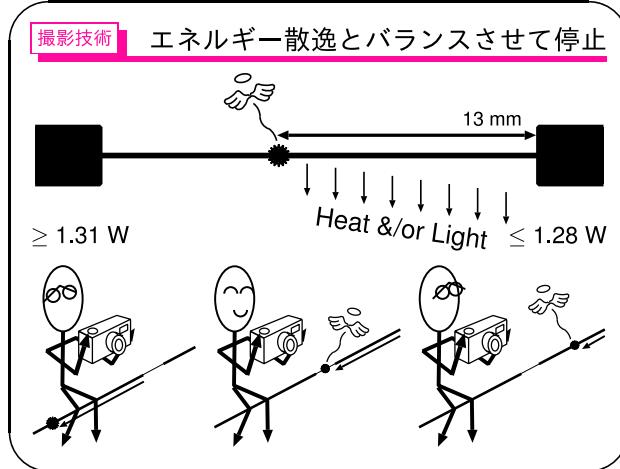
自分の手で書いた絵を書き貯めておくと、新しい絵を書く必要が出てきた時に、古い絵を土

台にすることが出来るので、描く時間を短縮することが出来る。Slide 5は、Slide 4に用いた絵の一部を再利用して、従来の局所的加熱法ではファイバフューズ発生の様子をカメラの視野に収めるのが難しいことを示している。聴衆にとっては、以前見た絵が再び出てくれれば、その絵の意味するところを即座に理解することが出来る。



Slide 5

イラストに人間を登場させると、その表情などから価値判断(良い、悪い、簡単、面倒など)を示すことが出来るので重宝する。Slide 6は、光ファイバケーブルの被覆を剥いた区間にカメラを向け、そこでファイバフューズを丁度停止させる条件を説明する上映資料である。ファイバフューズに供給する光の強度のある範囲に設定すれば、裸のファイバから散逸するエネルギーがブレーキとなって停止に至る。天使の輪と羽根を使って停止(消滅)する位置を示している。



Slide 6

全ての絵を自作で通せば、スタイルの一貫性とオリジナリティを聴衆に印象付けることが出来る。

参考文献

- [1] 轟 真市：“セレンディピティの磨き方 — ファイバヒューズ研究に至った縁と偶然(2) 世界初の超高速撮影 — 人を動かすプレゼンテーション”，工業材料, 55, 3, pp. 92–95 (2007).
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33120>

- [2] 轟 真市：“光ファイバの“路芯”溶融伝播 — ファイバヒューズ現象とその対策”，工業材料, 54, 12, pp. 48–51 (2006).
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33144>

セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術

【第4回】掴みを取る仕掛け

物質・材料研究機構 轟 真市

よき始まりは事の半分(カザフスタンの諺)[1]

セレンディピティ(偶然を契機にして道を切り開く能力)を磨く方法のひとつはプレゼンテーション技術にある[2]。この連載では、自分の仕事に触れた人が何らかのアクションを起こしてくれる様なプレゼンテーションを行なうために、筆者が特に重視しているノウハウを紹介している。前回は、上映資料1枚に収める文字の量は5行以内に抑え、代わりに自ら描いた絵を積極的に使うことを説いた。今回は、話の本題に入る前に聴衆の気を引き付けるための方法を解説する。

本題の上映資料を作り終えたら、、、

その前に示す上映資料を作成する。まずは表紙。連載第1回目で既に作っておいたが、その余白に「これぞ」と思う絵や写真を張り付ける[3]。既に完成させた上映資料の中から選んでくれば良いので、手間は掛からない。連載第2回で述べたように、聴衆の集中力は講演の最初が最も高い。この機を逃さず、「あれは何だろう?」と思わせて興味を引き付けるのである。

Slide 7は、とある材料系の研究会での発表で用いた上映資料である。移動するファイバフェーズのコマ送り写真(左)、通過後に残される空孔列の写真(中央)、および遠景写真(右)を示して、ファイバフェーズ現象のイメージを持ってもらうことを狙った。タイトルに「考古学的手法による」と、およそ材料の話題にそぐわない用語を用いたのも、興味を引き付けるための工夫だが、TPOをわきまえないと失敗するので注意が必要である。ちなみに「考古学的手法」とは、プ

ラズマが消滅した後に残された遺物(空孔)を集めて、プラズマが存在していた時の様子を考察したことを指している。

考古学的手法による ファイバフェーズの損傷生成機構の考察

物質・材料研究機構 物質研究所 轟 真市

撮影協力: フォトロン(株)
(1)
t = 0 μs
(2)
t = 10 μs
(3)
t = 20 μs



Slide 7

Slide 8は、産学官技術交流フェアでの口頭発表で用いたものである。広大な展示会場の一角に設けられた50席弱の特設会場での講演だったので、たまたま通り掛かった人にも興味を持つてもらうために、日刊工業新聞に掲載された記事を載せた。この場合、記事の内容が読めなくても問題ない。遠くから見て新聞記事だと分かれば良いのである。

光ヒューズ

過剰光を
自律的に遮断する
安全デバイス

轟 真市

NIMS
物質・材料研究機構
物質研究所

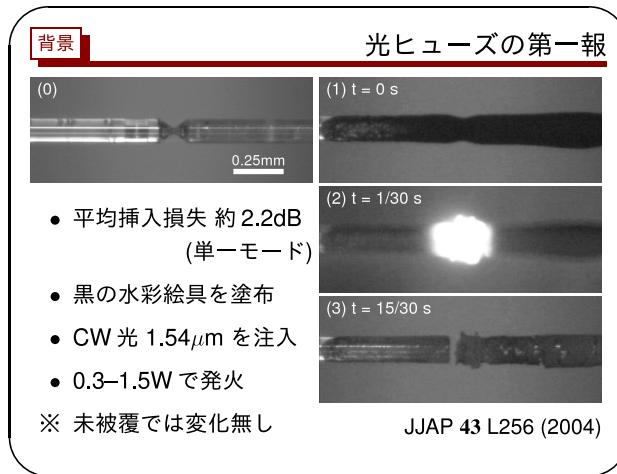


Slide 8

海外での口頭発表においても冒頭で興味を引き付ける原則は同じだが、言葉が不自由な分ハンディを負っている。ただし非英語圏での発表であれば、不自由さを逆手に取った良い方法がある。発表の最初に、その国の言葉で30秒程度のスピーチをするのである。フランス語、中国語、ロシア語で試みたことがあるが、どれも拍手を浴びることができた。現地語に堪能な人に協力を仰ぎ準備する必要があるが、それをするだけの見返りはある。現地語を解かない聴衆のために、英訳文を掲げるのを忘れずに。

背景説明から本題への流れ

続いて背景説明の上映資料を作成する。既に作成した目次の上映資料に掲げた3つの疑問文(第2回のSlide 2)を思い出し、それらの疑問が自然に湧いてくる様なイントロダクションを組み立てれば良い。Slide 9は、Slide 2の前に掲げた上映資料である。この一枚前で、光源が高出力化してきたこと、および過剰入力保護デバイスの必要性を指摘した。それを受けた形で、筆者の仕事のアウトラインを示した。もっと知りたい、と思わせておいて、Slide 2の疑問文を提示し、演者のペースに巻き込むのである。



Slide 9

[2] 轟 真市：“セレンディピティの磨き方 — ファイバヒューズ研究に至った縁と偶然(2) 世界初の超高速撮影 — 人を動かすプレゼンテーション”，工業材料, 55, 3, pp. 92–95 (2007).

<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33120>

[3] 松田 卓也：“プレゼン道入門”，パリティ, 14, 2, pp. 58–69 (1999). (改定第2.2版の入手先は <http://www.edu.kobe-u.ac.jp/fsci-astro/members/matsuda/review.html>).

参考文献

- [1] 米原万里：“他諺の空似 ことわざ人類学”，光文社 (2006).

セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術

【第5回】プレゼンテーションの「型」

物質・材料研究機構 轟 眞市

稽古とは一より習ひ十を知り 十よりかへるもとのその一 —千利休(1522-91)

セレンディピティ(偶然を契機にして道を切り開く能力)を磨く方法のひとつはプレゼンテーション技術にある[1]。この連載では、自分の仕事に触れた人が何らかのアクションを起こしてくれる様なプレゼンテーションを行なうために、筆者が特に重視しているノウハウを紹介している。前回までの4回で、上映資料一式を執筆する工程を、時間を追って説明した。今回は、今まで説いたことの応用と、プレゼンテーションの上達法を述べる。

ノウハウの応用

筆者はこの連載の冒頭で、紹介するノウハウは文章執筆にも応用できる、と書いた。では、この連載を執筆するのに、筆者はそのノウハウをどのように活かしたのだろうか？

第4回「掴みを取る仕掛け」では、発表の冒頭で聴衆の気を引くことの大切さを説いた。この連載では、冒頭に話の内容と関係ある名言や諺を配した。それも、意表を突いたり、皮肉になるものを選んで、読み手の興味を誘うことを意図した。

第2回で述べた「論理構造の視覚化」は、文章用にスタイルを変えて埋め込んである。冒頭のパラグラフでは前回のまとめと今回の内容を短く提示することで、話の流れを確認している。また、その次の節の表題を「～したら…」というスタイルで統一し、作業の時系列を意識させている。このスタイルは、上映資料の目次に配する3つの疑問文と同じ役割を持っており、読者の興味を誘導している。

とどろき しんいち: 光材料センター 主幹研究員
〒 305-0044 茨城県つくば市並木 1-1
URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/

名言や諺は、少ない文字数でコンセプトを伝えることができるので、上映資料の作成にも重宝する。第3回で述べた「5行ルール」を実行するためにも、字数を節約する有効な手段である。ただし、必要に応じて語句を入れ換えて、自分の意図に沿う様に直すことが多い。例えば筆者は以前、「窮すれば光ヒューズ」の9文字で、光ヒューズの発明は袋小路に至った後に達成されたことを表現した。

ポスター発表に用いるポスターの作成にも、紹介したノウハウを応用できるが、「掴みを取る仕掛け」に注意する必要がある。口頭発表で用いる上映資料をそのまま並べただけでは、何の掴みも無いに等しい。なぜなら歩いて回る観客にとって、最初に目に入るのはポスターの張られたボード全体だからである(鳥の目)。その視野で面白そうな事項が目に飛び込んでこなければならない。A4の紙十数枚が並んでいるだけではメリハリに欠ける。見て欲しい写真やグラフは大きく配置し、目次と結論(3行にまとめる!)はタイトルの真下に据える。相対的に重要度の低い事項は小さくて構わない(蟻の目)。

論理構造の視覚化に気を配り、目次との対応がひと目で分かるような配色やレイアウトを心掛ける。文章をなるべく少なくして絵を多用する。筆者の作成したポスターをインターネット上で公開しているので[2]、参考にして欲しい。
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:28394>
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:28396>

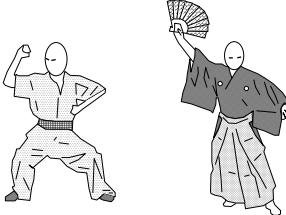
プレゼンテーションの「型」

本稿で述べたノウハウは、様々なプレゼンテーション形態における「型」として通用するものだと考えている。Slide 10は、筆者がプレゼン

テーション技術の講義をする際、導入部分で示す上映資料である。

今日の結論 「型」を身につけよ

- どんな分野にも「型」はある。
格闘技 → 技、套路、囲碁・将棋 → 定石
古典芸能
- 「型」に則る
→ その意味を理解する
= 最短距離を進む
- 「型」を踏まえた上に、
個性を築け
→ プレゼンテーションの型とは？



Slide 10

本稿では筆者が身に付けた「型」を紹介したわけだが、「型」は人それぞれ様々なものがあって良い。大事なことは、「型」の本質を理解し、常にその効果を充分に發揮しているかである。

「型」を身に付けるには稽古を繰り返すしかない。パソコンで原稿を執筆する場合の稽古とは、「型」を表現しやすい道具(ソフトウェア)を選び、その使い方に習熟することである。決して、「道具が先にあってそこから『型』を実現する」のではない。言い替えれば、「型」を容易に表現できるテンプレートやカスタマイズ機能を持ったソフトウェアを選ぶべきである。「型」を表現するたびに多くの手作業を要するのでは、それが億劫になるので、決して身につかない。

上映資料が完成したら、発表練習や推敲することも「型」の稽古である。本稿では詳しく触れられなかったが、話し方や立ち位置、ポインタの使い方にも「型」がある[2]。発表練習する自分の姿をビデオ撮影してチェックすると、今まで気がつかなかった欠点が見えてくるはずである。耳障りな口ぐせ、体が無駄に揺れる、レーザーポインタを握りしめて聴衆に背を向ける、などは、客観的に見ないと絶対に気がつかない。

プレゼンテーションの上達法は、以下の3つの諺に集約されると思う。

- 他人の振り見て我が振り直せ
- 己の欲せざる所は人に施すこと勿れ
- 言うは易く行うは難し

だから、同僚のプレゼンを積極的にかつ建設的に批評すべきである。指摘した以上は自分もそれを実行できていなければならない。それが上達のコツである。筆者がこの場でプレゼン技術を説いているのは、筆者自身のプレゼン技術を向上させたいがためなのである。

次回は連載の締めくくりとして、今まで述べたノウハウを盛りこんで作成した上映資料や文書を、発表した後でも活用し続けるための、インターネットの利用例を紹介する。

参考文献

- [1] 轟 真市：“セレンディピティの磨き方 — ファイバヒューズ研究に至った縁と偶然(2) 世界初の超高速撮影 — 人を動かすプレゼンテーション”，工業材料, 55, 3, pp. 92-95 (2007).
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33120>
- [2] 轟 真市：“プレゼンテーションと情報検索の技術”，セラミックス大学 (2007). 日本セラミックス協会教育委員会 (2001年より担当).
<http://www.ceramic.or.jp/>

セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術

【第6回】インターネットの活用

物質・材料研究機構 轟 眞市

ブラジルでの蝶の羽ばたきはテキサスでトルネードを引き起こすか？

—エドワード・ローレンツ(気象学者、1917-)が1972年に行った講演タイトルより

セレンディピティ(偶然を契機にして道を切り開く能力)を磨く方法のひとつはプレゼンテーション技術にある[1]。この連載では、自分の仕事に触れた人が何らかのアクションを起こしてくれる様なプレゼンテーションを行なうために、筆者が特に重視しているノウハウを紹介した。最終回は、このノウハウを活用して作成した文書・資料をできるだけ多くの人の目に触れさせるために、インターネットを活用した事例を紹介する。

YouTube の奇跡

2006年11月末のこと。NHKの夜のテレビ番組で、遅ればせながらビデオ投稿配信サイトYouTubeの存在を知った筆者は、プレゼンテーションの際に上映していた光ヒューズやファイバーフューズの短い動画が幾つかあるのに思い至り、早速投稿してみた(<http://www.youtube.com/Tokyo1406>)。翌朝筆者は、一通の英文のE-mailを目に驚愕した。

I read your recent papers on fiber fuse and saw the movies you made. Great work Shin-ichi! ...

(あなたのファイバーフューズに関する最近の論文を読み、また動画を見ました。たいした仕事ですね、、、)

米国のある航空宇宙関連企業の社員からのメールであった。一枚の写真が添付されており、ファ

イバレーザー実験の際に発生するファイバーフューズが残した不思議な空孔パターンに関して意見を求めるものだった。

タイミングからして、彼はYouTubeのビデオを見てから筆者の論文を読んだに違いない。その論文は1年以上前にオンライン出版されたもので、昨晚投稿したものと同じ動画がリンクされている。学術論文速報誌に掲載された筆者の論文は、単独では、1年経っても彼のアンテナに引っかかるなかったことになる。大衆向けインターネットサイトの影響力を見せつけられた出来事だった。

数ページの論文と十数秒の動画は、同じ土俵で比べられるものではない。しかし、情報の受け手が感じる敷居の低さは格段に違う。今回のケースでは、短い動画が誘い水となって、論文を読むという行動を引き出した。本連載で述べてきたノウハウは、すべてこの「相手の興味を引き出す(持続させる)」ことに通じている。

セルフアーカイビングの薦め

せっかく苦労してわかり易く作成した上映資料や論文・読みものを単発の機会だけでお倉入りさせるのはもったいない。発表の際にお世話になった学会や出版社の権利を侵害しない範囲で、ホームページ上で公開するのが手っ取り早い方法である。私設のホームページではYouTube程の影響力は期待できないにせよ、検索サービス経由で来訪者はやってくる。本連載記事も編集部の許可を取り、原稿のPDFファイルの形で個人ホームページ上で公開している。

「ホームページを立ち上げて、日々管理する時間は無い。」と思われる方も多いだろう。筆

者に言わせれば、ホームページの作成にも「型」がある。「型」の実現を自動化できるソフトウェアを使えば、必要最小限の労力で読者の興味を引き出すページを維持・管理することができる。その詳しいノウハウは既に別の記事[2]にまとめたので、ここではそのエッセンスを述べることにする。

1. 自分に役立つ情報源にする[3]。 そうすれば、日々管理することが義務でも苦痛でもなくなる。筆者の場合、研究業績リストから出発して徐々に機能を増やしていき、手元のパソコン内のファイル検索や執筆スケジュール管理に活用できる情報源にまで育て上げた。さらに、自分用のページとは別に公開用のページを自動生成させることで、来訪客の興味に沿うものだけを公開している。

2. ちょっとだけでもマメに更新する。 何か更新すべき情報をキャッチしたら、いつでもどこでも2分以内に更新できる様な体制を構築しておく。「時間が空いた時にまとめて、、、」と流してしまって、忘れたり、余計に時間を確保しなければならなくなる。ホームページの更新頻度が高ければ、検索サービスが巡回してくる頻度も高まり、より新鮮な情報を元に来訪客が誘導されてくる。「常に最新情報が得られる。中身も面白い。」と印象付けられれば、リピーターが増えていく。

連載を終えて

教育職でもない筆者がプレゼンテーション技術を人に伝えるまでになったきっかけは、研究職として就職した後に受けた社内研修である。今から約13年前のこと、英語でのプレゼンテーション技術を丸2日、16時間、二人の外国人講師から仕込まれ、目から鱗が落ちた。それまでの筆者は、人の話を最前列で聞いていてもすぐ眠くなる、集中力の無い人間だと思っていた。ところが実は、世の中にはプレゼンテーションが下手な人が溢れていることに気がついたのである。

その研修で伝授されたのは、まさにプレゼンテーションの「型」であった。示されてみれば当り前のように見える「型」だが、それを常に実行している人は究めて少ない。筆者が考えるに、その理由は、毎回「型」をゼロから構築することの面倒臭さにある。よって、自分の目先の都合が優先され、聴衆の立場が顧みられなくなってしまう。しかし、パソコンで原稿を書くのが当り前になった昨今、面倒臭い作業はパソコンに任せ、より本質的で創造的な作業に注力した方が良いのは明らかである。

連載第2回で触れたが、筆者がプログラミング機能が利用できるソフトウェア(pLaTeX2e)ですべての文書を執筆しているのは、このためである。それがきっかけのひとつとなって、あの偶然[1]を捕まえることができたのだと思う。本稿が読者の方々がセレンディピティを発揮するきっかけになることを願って筆を置く。

おしらせ

筆者によるプレゼンテーション技術の講義を、セラミックス大学2008(5月開講)の枠内で行います。詳しくは、日本セラミックス協会ホームページ(<http://www.ceramic.or.jp>)をご覧下さい。

参考文献

- [1] 轟 真市：“セレンディピティの磨き方 — ファイバヒューズ研究に至った縁と偶然(2) 世界初の超高速撮影 — 人を動かすプレゼンテーション”，工業材料, 55, 3, pp. 92–95 (2007).
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33120>
- [2] 轟 真市：“研究業績リストの電子化—研究者のための執筆・発表支援システム”，セラミックス, 42, 7, pp. 520–524 (2007).
<http://pubman.mpdl.mpg.de/pubman/item/escidoc:33096>
- [3] 野口 悠紀雄：“ホームページにオフィスを作る”，光文社新書011 (2001).